『語学研究所論集』第6号
東京外国語大学　語学研究所　2001年
pp.1-29

『語学研究所論集』第6号(2001), pp. 1-29

# 「ディスコース・ポライトネス」という観点から見た敬語使用の機能
## ー敬語使用の新しい捉え方がポライトネスの談話理論に示唆すること[1]ー

宇佐美まゆみ

**要旨**

本稿では、日本語における敬語を、文法的観点からではなく、その運用とそれが生み出す対人関係調節機能の観点から捉え直し、本文で定義する「ディスコース・ポライトネス[2]」の枠組みで論じる。つまり、敬語使用というものは、重要ではあるが、対人関係調節行動としての広義の「ポライトネス」、及び、それを談話レベルで捉える「ディスコース・ポライトネス」の中で、なんらかの役割を担っている種々の要素のうちの一つであるという捉え方を示す。具体的には、対話相手の年齢、性を統制して組み合わせた初対面二者間の日本語会話、72会話のデータに基づいて、まず、各発話文中[3]の敬語の選択や、文末のスピーチレベルのシフト操作が、ディスコース・ポライトネスの中でいかなるふるまいを見せているかを記述し、その機能を考察する。これらの結果に基づいて、現在の敬語使用に反映された現代日本人の価値観を探るとともに、今後の敬語使用の変化の方向を予測する。その上で、敬語を有する言語とそうでない言語のポライトネスを同じ枠組で比較・検討することを可能にし、ポライトネス理論をより普遍的なものへと発展させていくためには、「総体としての談話それ自体」を、ポライトネスを規定する変数の一つに加えて考える「ディスコース・ポライトネス（DP)」という捉え方を導入することが必須であるということを論じる。

## 1.　はじめに

談話研究において、種々の言語行動の機能をよりダイナミックに捉えるためには、当該の発話の前後のコンテクストを考慮に入れるという「ローカルな」観点からの分析のみならず、話者・対話者の年齢、社会的地位、性等の社会・文化的要因など、当該の会話内の言語体系外の「グローバルな」要因の影響も考慮に入れ、ローカル要因、グロ

ーバル要因双方が言語行動に与える影響と、その相互作用を分析する必要がある（宇佐美、1995）。

しかし、近年盛んになってきている談話分析・会話分析は、特定の言語要素が談話においてどのような機能を持っているかを、発話の素材や内容、話者間の心理的距離、発話のコンテクスト等を考慮しながらも、当該の会話内のやりとりという「ローカルな」観点から分析するにとどまっている感がある。敬語の使用・不使用の切り替えというようなスピーチレベルシフトに焦点を当てた研究についても、質問紙調査に基づいた敬語使用の実態調査とは異なる観点から敬語使用の機能を捉え、新しい知見をもたらしているものも多いが、やはりローカルな観点からの分析が多いといえる。

そこで、本稿では、７２の初対面二者間会話における敬語使用を、発話文中のスピーチレベルの選択やスピーチレベルのシフト操作という観点から捉え、これまであまりなされてこなかった、グローバルな要因がこれらの言語行動に及ぼす影響に焦点を当てて考察する。また、そうすることによって、現在の敬語使用の大局的な傾向とその変化の方向を、「ディスコース・ポライトネス」という観点から考察する。

「ディスコース・ポライトネス」は、以下のように定義する。「一文レベル、一発話行為レベルでは捉えることのできない、より長い談話レベルにおける要素、及び、文レベルの要素も含めた諸要素が、語用論的ポライトネスに果たす機能のダイナミクスの総体である。」（宇佐美、1997b；1998b）。

また、筆者は、ポライトネスを、「有標ポライトネス（marked politeness）」と「無標ポライトネス（unmarked politeness）」とに分けて考える必要があると考えている（Usami、1999b；2000c；2000d；宇佐美、2001）。例えば、Brown & Levinson（1987）は、相手のフェイスを脅かす行為、フェイス侵害行為（FTA：Face Threatening Acts）をせざるを得ないときに、「相手のフェイス侵害度［FT（Face Threat）度］を軽減するためにとる言語ストラテジー」をポライトネスとして捉えているが、筆者は、これを「有標行動」と捉え、その効果としてのポライトネスを「有標ポライトネス」と捉える。

しかし、一方、我々の日常生活においては、それとは異なるタイプのポライトネスもある。それは、「守られていて当たり前で、その期待される言語行動がないときに、



初めてそれが意識され、ポライトではないと捉えられる」という類のものである。特別に丁寧でも失礼でもない発話、及び、談話である。この特定の状況ごとに暗黙のうちにある「守られていて当たり前なことを満たしている、失礼のない発話、及び、その集合体としての談話の状態」を「無標ポライトネス」と捉える。

ディスコース・ポライトネスを構成する要素には、言語形式だけではなく、話題導入頻度（Usami、2000a）や適切なあいづちの打ち方なども含めるが、例えば、言語形式を例に取った場合、発話効果としての語用論的ポライトネスを生み出しているのは、「行く」、「いらっしゃる」などの言語形式自体の丁寧度ではなく、当該の談話におけるディスコース・ポライトネスの「基本状態（default）」からの離脱や回帰など、その「動き」であると捉えるのである。例えば、基本状態における基本形が常体であるディスコース・ポライトネスを確立している恋人同士の一方が、「それは、よろしゅうございましたね」と言ったとしたら、それは、「丁寧だ」というよりは、宣戦布告か、或いは、冗談だと解釈するほうが妥当だろう。

本研究は、日本人社会人の初対面の会話における無標ポライトネス、すなわち、ディスコース・ポライトネスの基本状態における敬語・スピーチレベルのふるまいを実証的に同定し、その状態からの「動き」としてのスピーチレベルシフトを分析することによって、ディスコース・ポライトネスという観点から、敬語使用の機能を明らかにしようとするものである。

## ２．方法

### ２．１ 実験計画

本研究では、言語社会心理学的方法論（宇佐美、1999）を用いて、主に、話者間の相手の属性（いわゆる目上、同等、目下）に関する認知が、話者の言語行動にいかに影響を与えるかを分析する。そのため、Brown and Levinson（1987）のポライトネス理論において、ポライトネスを規定するとされている三要因[4]、話者間の「力関係（Power）」、「社会的距離（Distance）」、特定の文化において「ある行為が相手にかける負荷度（Risk of imposition）」のうち、「社会的距離」と「負荷度」については、それぞれ、「初対面の相手であること」、「同様の場面で同様の話題について話してもら

うこと」によって条件を一定に保ち、その上で、ベースと対話相手との「力関係」と「性」の要因を操作した。(本研究では、「力関係」は、相手から見た「年齢と社会的地位の評定値の合計」の高低で見る。以後、便宜上、「年齢が上」などと記することもある。)

具体的には、12名の35歳前後のベースのインフォーマント(女性)に、それぞれ同性の「目上(45歳)」「同等(35歳)」「目下(25歳)」、異性の「目上(45歳)」「同等(35歳)」「目下(25歳)」、の計6通りの相手を割り振り、約15分ずつの会話、合計72会話を採集した。以下の表1に実験計画を示す。

表1　実験計画

| 一人のベース(35)から見た対話相手(　)内は年齢 | Brown & LevinsonのFT度を見積もる公式における変数 | | |
|---|---|---|---|
| | 力関係(P) | 社会的距離(D) | 相手にかける負荷度(R) |
| | 年齢・社会的地位 | 初対面 | 初対面の会話 |
| 目上　女性　(45) | + | = | = |
| 目上　男性　(45) | + | = | = |
| 同等　女性　(35) | = | = | = |
| 同等　男性　(35) | = | = | = |
| 目下　女性　(25) | − | = | = |
| 目下　男性　(25) | − | = | = |

## 2．2 インフォーマント

インフォーマントは、大学卒、有職で共通語話者の女男延べ144名である。「ベース(BF)」は女性12名(平均年齢34.8歳)、対話相手は、「目上」(平均年齢、女−45.7歳、男−43.8歳)、「同等」(女−34.9歳、男−34.5歳)、「目下」(女−23.7歳、男−25.5歳)の女男延べ各36名である。

## 2．3 実験手続き

すべての会話は、名前も含め、互いにほとんど相手についての情報を知らされていない初対面同士の会話である。インフォーマントには、特に「話題」は与えず、懇親会などで初めて会った人と話をするようなつもりでできるだけ自然に話すよう、また、



この実験自体についてや、実験者との関係等については言及しないよう指示した。実験者が二人を引き合わせた後は、会話をすべて録音するよう伝え、その後実験者は退室した。会話終了後は、フォローアップ・アンケートを行い、すべてのインフォーマントに、①相手の年齢・社会的地位をどう認知したか。②相手が初対面の相手としてどのくらい話しやすかったか。③録音を意識せず自然に話すことができたか。④相手の言葉に失礼だと感じたことがあったか等、について、また、会話協力が2回目以上のインフォーマントについては、①〜④に加えて、⑤その会話が初めてではないことが、自分の話し方や話の内容に影響を与えたか(繰り返しの影響の有無)などについて、5段階で評定してもらい、自由記述も求めた。これらの結果を集計、分析し、データの妥当性を確認した。(詳細は、Usami (1999a) を参照のこと。)

## 2．4 分析方法

### 2．4．1 文字化の原則

上記の方法で採集した72会話について、適切なスピーチレベルの選択を判断したり、交渉するという日本語の初対面の会話の特徴が最もよく表れる部分である最初の3分間を、「基本的な文字化の原則 (Basic Transcription System for Japanese:BTSJ)」(宇佐美、1997a) に従って文字化した。文字化に際しては、発話の認定やライン変えの原則の信頼性を確認するために、第一認定者(筆者)と第二認定者[5]が、全文字化資料の8.3%を、それぞれ別個に認定し、その判断の一致度を確認した(Cohen's kappa $k=0.93$[6])。以下のコーディングも、すべて第二コーダーを立て、コーダー間の一致度(Cohen's Kappa)が、信頼性が高いとされている0.75以上であることを確認している。

BTSJでの文字化やコーディングの例は、各コーディングの方法の説明の後の、図1に示す。ライン換えなどのより詳細な原則については、宇佐美(1997a)を参照されたい。

### 2．4．2 コーディング

従来の、質問紙調査に基づく敬語研究などにおいては、尊敬語・謙譲語等の使用・不使用と文末が敬体か常体かということが、明確に区別して分析されることがなかった。

しかし、例えば、誰かに「行くのか」と尋ねる場合、「尊敬語の使用・不使用」「文末が敬体か常体か」という観点から考えると、以下の４通りが考えられる。

| | | |
|---|---|---|
| （1） | いらっしゃるんですか？ | 尊敬語・敬体 |
| （2） | いらっしゃるの？ | 尊敬語・常体 |
| （3） | 行くんですか？ | 普通動詞・敬体 |
| （4） | 行くの？ | 普通動詞・常体 |

言語形式の丁寧度は、「行く」より「いらっしゃる」のほうが高く、敬体と常体では、当然、敬体のほうが丁寧度が高いので、（2）と（3）とどちらが「丁寧か」と尋ねられたら、インフォーマントは、一瞬惑うようである。それは、尊敬語の使用ということと、文末が敬体か常体かということを明確に区別した上で、その丁寧度が論じられることがあまりなかったからであろう。

しかし、（2）のような表現は、中年以上の女性話者が、同等か目下の人に話す場面を連想させる。尊敬語を使ってはいるが、目上には使いにくい表現である。このような言語使用の実態と、その機能を明らかにしていくためには、「行く」を使うのか、「いらっしゃる」という尊敬語を使うのかという語彙の選択の問題と、文末が敬体か常体かということを、明確に区別して分析する必要がある。つまり、「ディスコース・ポライトネス」という観点からは、それぞれの選択が、ディスコース・ポライトネスの一要素となっており、各々異なる役割を果たしていると捉えるからである。

以上のような考えに基づき、すべての発話文（7327）を以下の項目ごとにコーディングした。

**「スピーチレベル」のコーディング**

すべての発話文を以下の３つの観点から分類した。①「文中」に尊敬語、謙譲語等が含まれるかどうか、②「文末」が敬体か常体か、そのどちらもないか。さらに、③文末が敬体か常体かという形式にこだわらず、コンテクストや音声面も考慮して、その発話がフォーマルなものか、くだけた（カジュアルな）感じがするかという「機能」を重視した観点からのコーディングである。

**①形式：発話全体（文中 POL）**－主に、話者の敬語、スピーチレベルの使用頻度の傾向を見るためのもので、ひとつの発話文に含まれる形式の丁寧度の最も高いものによって、コーディングする。（その発話文に S がひとつでも含まれていれば、「S」となる。）

Ｓ－Super-polite form （尊敬語・謙譲語、られる、わたくし等を含む発話）

Ｐ－Polite-form （敬体を含む発話）

Ｎ－Non-polite form （常体を含む発話）

NM－No-marker （丁寧度を示すマーカーのない発話。中途終了型発話等）

**②形式：文末形式（文末 POL）**－「文末の形式のみ」によって判断する。

Ｐ－Polite-form （敬体）

Ｎ－Non-polite form （常体）

NM－No-marker （マーカーなし）

後述のスピーチレベルの「シフト」は、この文末のスピーチレベルで判断する。

**③実際的な表現効果・機能：（機能 POL）**－文末が敬体か常体かという形式にこだわらず、その発話がフォーマル（F）なものか、カジュアルな（C）感じがするかという「機能」を、コンテクストや音声面も考慮して、コーディングする。今回の分析では、主に、丁寧度を示す言語マーカーがない発話文のスピーチレベルシフトを認定する際に、用いた。

F－ フォーマル

C－ カジュアル

その他、中途終了型発話、単語レベルの発話など、様々な観点からサブ・コーディングを行ったが、ここでは省略する。

**「スピーチレベルシフト」のコーディング**

「スピーチレベルシフト」は、上記②のコーディングで、文末に「常体（N)」が表れたところに着目し、その前後のシフト関係を、直前の発話が相手か自分かという観点も含めてコーディングした。直前の発話が「自分（Self)」の場合は、その前の「相手（Interlocutor)」の発話からのシフトの有無も見る。同様に直前の発話が「相手」の場合は、その前の「自分」の発話からのシフトの有無も見る。

以下の図１に、BTSJ に基づく文字化と、コーディングの例を示す。

| レコード No. | 発話文 No. | 発話終了 | 話者 | 発話内容 | 文中 POL | 文末 POL | 機能 POL | 直前 シフト | 直前前 シフト |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 18 | 18 | * | SM 01 | えー、前らよっとねえ、（ええ）あのー、学校の方にコンピュータのあのー、機械をですね、（ああ）納品する仕事をやったことがありましてね。 | P | P | F | | |
| 19 | 19 | * | BF 01 | えーえーえー。 | NM | NM | F | | |
| 20 | 20 | * | SM 01 | 何とか文理大学っていうがなあー。 | N | N | C | DI | DS |
| 21 | 21 | * | BF 01 | あー。 | NM | NM | R | UI | NS |
| 22 | 22 | | BF 01 | /少し間/なんかでもすごい田舎で、小学生の時だったんですけど、（ええ）カルチャーギャップがすごいあってー、 | | | | | |
| 23 | 23 | * | SM 01 | あっ、そうですか。 | P | P | F | | |
| 24 | 22 | * | BF 01 | えーっ、びっくりしましたよ。 | P | P | F | | |

図１ BTSJ による文字化、本研究におけるコーディングの例

図１の略号の意味は以下の通りである。

*: 一つの発話文がそのラインで終了していることを示す。例えば、図１の例の中のレコード番号 22 は、相手の発話を間に挟んだ後の、レコード番号 24 へと続き、そこで



１発話文が終了していると捉える。一つの発話文と認定したものには、それが数ラインにまたがっていても、同じ発話文番号をつける（レコード番号 22 と 24 の発話文番号は、共に、22 となる)。これは、後に、発話文単位で集計するためである。

BF : Base Female　　SM: Same-age Male

DI…Down-shift from Interlocutor　　DS…Down-shift from Self

UI…Up-shift from Interlocutor　　US…Up-shift from Self

NS…No-sift from Interlocutor　　NS…No-sift from Self

## ３．仮説

先行研究の結果、筆者自身の予備研究の結果（Usami, 1993;1994;1996 等）に基づき、以下のような仮説を立てた。

① 初対面の会話という本研究の状況では、尊敬語等の使用頻度は、対話相手の待遇というよりも、話者自身の言葉遣いやスタイルの特徴を指標するだろう。

② 文末が敬体か常体かの区別のほうが、尊敬語等の使用よりも、対話相手への配慮、心的距離、待遇を、より顕著に指標するだろう。

③ 「文レベル」における敬語の選択等よりも、「談話レベル」の現象であるスピーチレベルシフトなどのほうが、相手との関係をより顕著に反映するだろう。

## ４．結果と考察

### ４．１　発話文数

72 会話で、分析対象となった総発話文数は、7327、１会話ごとの平均 101.8（49-152 の範囲、*SD* 7.8 で、発話文数が 60 を下回る会話 2、150 を上回る会話１）である。分散分析の結果、ベースの発話文数は、対目下より対同等の相手との会話において、有意に少なかった（$F$=7.90、$p$<0.05)。対話相手側から見ると、対同等のベースとの会話における発話文数は、対目上、対目下との会話におけるよりも、有意に少ない（それぞれ $F$=10.26、$p$<0.01 ; F=23.68、$p$<0.001）という結果が出た。同じ時間の会話において発話文数が少ないということは、逆に言えば、1 発話文が長いということである。これについては、後のスピーチレベルの結果と合わせて考察する。

### 4．2 発話文割合

各対話相手ごとのベース 12 名と対話相手の発話文数の割合の平均値の分散分析の結果、年齢、性、いずれにおいても有意差は見られなかった。つまり、どの会話も、どちらか一方が極端に多く発話するということはなかった。先の発話文数の結果と合わせて考察すると、同等との会話においては、発話文数が少なめであるが、話者間での割合における偏りはないということである。

### 4．3 スピーチレベル

#### 4．3．1 ベース側から見た結果（対話相手に応じた言語使用）

まず、文中の各スピーチレベルが各話者の総発話文数に占める割合の平均値をベース側から見たものを、以下の図２に示す。図２を見ると、Brown & Levinson の理論と敬語使用の原則双方が予測するような、尊敬語等を含む発話（S）が、対目上に対して最も多く使われる、という結果にはなっていないことが明らかである。しかし、各会話とも約 60-70%が、尊敬語等、或いは、敬体を含む発話（S+P）となっており、社会人同士の初対面の会話という「談話」のディスコース・ポライトネスにおける、無標スピーチレベルは、敬体であると同定することができよう。また、さらに注目すべき点は、丁寧度を示すマーカーのない発話（NM）が、総発話文数の約 25-30%を占めているという事実である。

分散分析の結果の中から主なものを示すと、尊敬語等を含む発話（S）、敬体を含む発話（P）、丁寧度を示すマーカーのない発話（NM）ともに、対話相手の年齢、地位、性による有意差は見られなかった。ただ、常体を含む発話（N）のみが、対話相手の年齢に関して有意差を示した。すなわち、ベース話者は、目下の対話者に対して、それぞれ同等、目上の対話者に対するより、有意に多く常体を含む発話（N）を使用していた（$F$=6.20、$p$<0.05；$F$=8.12、$p$<0.05）。

つまり、分散分析の結果に基づくと、ベースは、対話相手の年齢、性にかかわりなく、尊敬語等を含む発話（S）、敬体を含む発話（P）、丁寧度を示すマーカーのない発話（NM）を用いているが、常体を含む発話（N）のみは、目下の相手に対して有意に多く用いられていたということである。



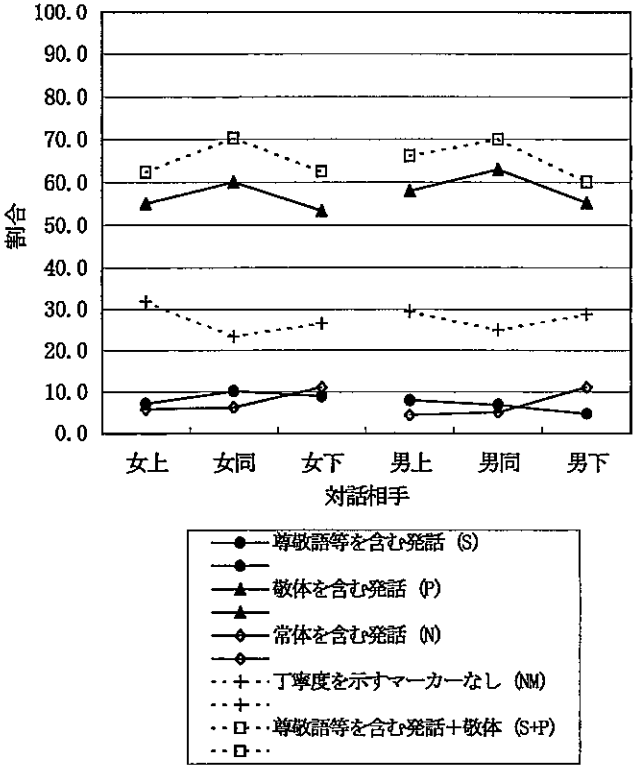



図2 総発話文数に占める各文中スピーチレベルの割合の平均値
（ベース側からの結果）

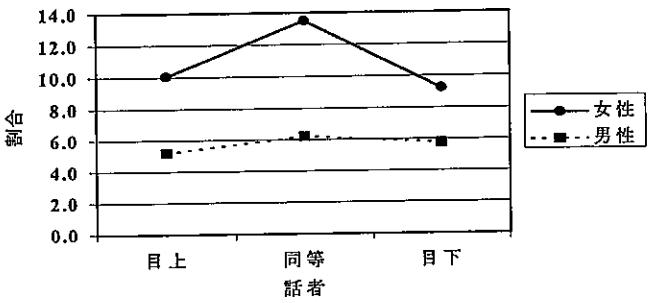
このことから、対話相手との力関係（年齢、社会的地位）を顕著に反映しているのは、尊敬語等の使用ではなく、常体の使用であることが分かる。初対面の会話においては、目上の人により多く敬語を使うのではなく、目下の人により多く常体を使うという傾向のほうが顕著であることが明らかになった。

### 4．3．2　対話相手側から見た結果（話者の言語使用の傾向）

次に、対話相手の側からデータを分析することによって、話者による言語使用の傾向を考察する。対話相手のデータにおいても、常体を含む発話（N）は、目上の話者が、それぞれ同等、目下の話者より有意に多く用いていた（$F$=23.06、$p$<0.001；$F$=15.09、$p$<0.01）。しかし、話者の性による有意差はなかった。目上の話者にとって、ベースは、目下の対話相手ということになるので、これは、目下の対話相手に有意に多く常体を含む発話（N）が用いられたという、ベース側から見た結果を支持していることにもなる。

**＜尊敬語等を含む発話（S）＞**

対話相手のデータからは、「話者の年齢・性」による言語行動の傾向が分析できる。ベースの結果では、尊敬語等を含む発話（S）、敬体を含む発話（P）、丁寧度を示すマーカーのない発話（NM）、いずれにおいても、「対話相手の性」による有意差はなかった。しかし、対話相手側のデータを見ると、「話者の性」に関しては、これらすべてにおいて有意差が見られた。このうち、尊敬語等を含む発話（S）の結果を次の図３に示す。




| | $F$-value | |
|---|---|---|
| 年齢 | 1.76 | |
| 性 | 44.75** | **: $p$<0.01 |

図３　話者ごとの総発話数に占める尊敬語等を含む発話の割合の平均値
（対話相手側から見た分散分析の結果）



図３に示されたように、どの年齢グループにおいても、尊敬語等を含む発話は、女性話者が男性話者より多く用いている。フォローアップ・アンケートにおける、相手の年齢、社会的地位の評定値に男女の有意差はなかった。また、男女とも、対話相手に当たるベースが同一人物であることから考えると、この差は、尊敬語等の使用が、「対話相手」に応じた待遇を指標しているというより、話者個人の言葉遣いのスタイルを反映していると捉えられる。つまり、この結果は、女性のほうが男性より、尊敬語等を含む発話を相対的により多く用いるという、従来から繰り返し報告されている傾向を実証的に裏付けている。ここで、解釈上、注意すべきことは、この結果が、力関係の弱いものが、尊敬語等を含む発話をより多く用いるというように、対話相手との関係を直接的に反映しているわけではないという点である。以下の結果もそれをよく示している。

つまり、女性話者同士を比較すると、目下にあたる女性話者の尊敬語等の使用が最も低い。この結果は、尊敬語の使用が相手への待遇を表すものだということを前提にすると、Brown & Levinson の理論の予測、敬語使用の原則双方に反する。しかし、今後、初対面の会話において、尊敬語等を含む発話の割合が徐々に減少していくであろうことを予測させる。

**＜敬体を含む発話（P）＞**

敬体を含む発話（P）の使用傾向は、ベースと同等の話者が、それぞれ目上、目下の話者より、有意に多く敬体を含む発話（P）を用いるという傾向を示した（$F$=14.09、$p$<0.01；$F$=16.58、$p$<0.01）。これは、以下の丁寧度を示すマーカーのない発話（NM）の結果と合わせて考えると分かりやすいが、後述のように、同等同士の会話においては、文を最後まで言いきった形の発話が多く、丁寧度を示すマーカーのない発話（NM）が、他の年齢グループと比べて有意に少ない。そのことが、自ずと、敬体を含む発話（P）の割合を高めていると考えられる。

敬体を含む発話（P）使用の性差については、どの年齢グループにおいても、男性のほうが、女性より多くを用い、また目上の男性が、同等、目下よりも有意に多く用いていた（$F$=11.72、$p$<0.01；$F$=5.67、$p$<0.05）。ただ、この結果は、男性のほうが、より丁寧な言語形式を用いるということではなく、常体を使わない、使えないという

同様の条件下においては、女性は、尊敬語を含む発話（S）を用いることが多く、男性は、尊敬語は含まないが敬体を含む発話（P）を用いることが、相対的に多いということを示している。

以上のような結果は、概ね、仮説①「初対面の会話という本研究の状況では、尊敬語等の使用頻度は、対話相手の待遇というよりも、話者自身の言葉遣いやスタイルの特徴を指標するだろう」を支持していると言えよう。

**＜中途終了型発話などの丁寧度を示すマーカーのない発話（NM）＞**

中途終了型発話などの丁寧度を示すマーカーのない発話（NM）の使用については、話者の性による差はなかった。しかし、年齢に関しては、同等の話者の使用頻度が、それぞれ目上、目下の話者より、有意に少なかった（$F$=9.72、$p$<0.01；$F$=34.96、$p$<0.001）。つまり、中途終了型発話などの丁寧度を示すマーカーのない発話（NM）は、対目上、対目下という、話者間の年齢、社会的地位が非対称的な会話において、より多く用いられているということである。

以上の結果を、４．１　発話文数で述べた、同等同士の会話の総発話文数が、目上、目下との会話より、有意に少なかったという結果と合わせて考えると、以下のようになる。同等同士の会話においては、一発話が長く、最後まで言いきっている発話が相対的に多いため、丁寧度を示すマーカーが現われやすい述部も相対的に多くなる。そのことが、ベースの尊敬語を含む発話（S）、敬体を含む発話（P）、それらの合計（S+P）の頻度が、目上や目下よりも、同等の相手に対して最も高いという結果となって表れていると考えられる。

### ４．３．３　丁寧度を示すマーカーのない発話（NM）を除いた結果

諸要素のダイナミックな総体としてのディスコース・ポライトネスの観点から、中途終了型発話などの丁寧度を示すマーカーのない発話（NM）の機能を探るために、各話者の総発話文数から丁寧度を示すマーカーのない発話（NM）を除いた、丁寧度を示すマーカーがある発話文の総数に占める、各スピーチレベルの割合を算出した。これは、丁寧度を示すマーカーのない発話を除外して考えると、丁寧度を示すマーカーのある発話の本来の機能が、より明確に見えてくると同時に、中途終了型発話などの丁寧度を示すマーカーのない発話（NM）がディスコース・ポライトネスの中で果たす役割も探ることができるという予測のもとに行った。以下の図４に結果を示す。



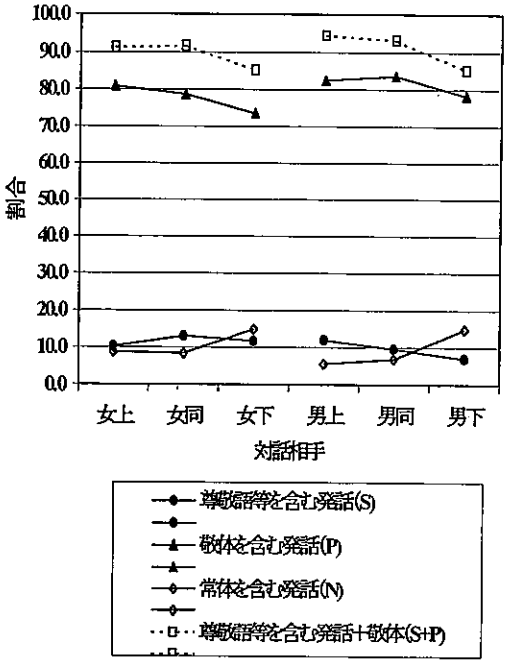



図４　丁寧度を示すマーカーのない発話を除いた発話文数に占める各スピーチレベルの割合の平均値（ベース）

丁寧度を示すマーカーのない発話も含めている図２と比較すると明らかなように、図４では、常体を含む発話（N）だけでなく、敬体を含む発話（P）も、対話相手の年齢にほぼ比例しているという傾向が見えてくる。つまり、目上の話者に対してより多くの敬体を使う、という Brown & Levinson の理論と敬語使用の原則双方が予測する結果に近い傾向が見えてくる。

しかし、分散分析のベース側からの結果では、すべての発話文を分析対象とした場合（図３の結果）と同様に、目下の対話者に対して常体を含む発話（N）をより多く用いるという結果のみが有意であった。しかし、対話者側からの結果を見ると、丁寧度を示すマーカーのない発話（NM）も含めて分析した際には、同等の話者が、目上、目下の話者よりも、敬体を含む発話（P）を有意に多く使用していたのに対して、丁寧度を示すマーカーのない発話（NM）を除外すると、目上の話者の敬体を含む発話（P）の使用が、同等、目下の話者よりも、有意に少ないという結果になった。これは、むしろ、目上の話者が、常体を含む発話（N）を有意に多く用いるという結果と相補的であり、目下に対して、同等、目上とは異なる言語行動が現われやすいことを示している。

文末のスピーチレベルについても、文中のスピーチレベルとほとんど同様の傾向を示したので、ここでは、省略する。ただ、仮説②「文末が敬体か常体かの区別のほうが、尊敬語等の使用よりも、対話相手への配慮、心的距離、待遇を、より顕著に指標するだろう」については、必ずしも仮説が支持されたとは言えない。つまり、対話相手との関係を、より顕著に指標するのは、尊敬語等の使用・不使用の問題、文末のスピーチレベルの問題を問わず、「常体の使用」であったからである。

### ４．３．４　スピーチレベルの結果の総合的考察ー文レベルにおける言語形式選択のディスコース・ポライトネスにおける機能ー

尊敬語等の使用・不使用と文末が敬体か常体かを明確に分けてコーディングし、分析することによって明らかになった、以上のような結果を総合的に捉えてまとめると、以下のようになる。

① 常体を含む発話のみが、対話相手との力関係（年齢、社会的地位）を顕著に反映している。つまり、話者間の力関係をより顕著に反映しているのは、尊敬語等の使用ではなく、常体の使用のほうであると言える。これは、初対面の会話というディスコースにおいては、常体を使うことが有標行動となっているからであると考えられる。ただし、本稿では扱えなかったが、常体の使用は、その場を和らげるために冗談を言ったり、相手に対する共感や親しみを表すというようなポジティブ・ポライトネスの機能を持ったものが多く、そのほとんどが、上下関係が明確になるぞんざいな言葉遣いというものではないというところに、注目する必要がある。

② 本研究の条件下では、年齢・社会的地位の評定結果に男女差がないにもかかわらず、女性のほうが男性より、尊敬語等を含む発話を有意に多く用いていた。また、女性話者を比較すると、目下にあたる女性話者の尊敬語等の使用が最も低かった。特に、最後の結果は、尊敬語の使用が相手への待遇を表すものだということを前提にすると、Brown & Levinson の理論の予測、敬語使用の原則双方に反するものである。しかし、本研究の結果から、初対面の会話における尊敬語等の使用は、今日では、対話相手の待遇の度合いより、むしろ、話者個人の属性や、話者がアイデンティティーを帰属させている社会的集団に特徴的な言葉遣いなどのスタイルを指標する傾向のほうが強くなってきていることが明らかになった。また、目下に当たるインフォーマント（25 歳前後）の尊敬語等を含む発話の使用が相対的に少ないという結果は、今後、初対面の会話において、尊敬語等を含む発話の割合が徐々に減少していくであろうということを予測させる。

以上は、主に、スピーチレベル自体の機能についてである。しかし、ディスコース・ポライトネスという観点から、重要視したいのは、むしろ、実際の会話においては、約 25-30%もの丁寧度を示すマーカーのない発話が発せられているという事実のほうである。フォローアップ・アンケートの結果は、今回のインフォーマントが、相手の社会的地位の評定を、年齢より高めに評定する傾向にあることを示していた。また、相手の社会的地位に上下をつけることに抵抗を感じるという自由記述もあった。これらの結果を総合的に考えると、以下のように解釈できる。すなわち、力関係（年齢・社会的地位）が非対称的な話者間の会話において、文を最後まで言いきってしまうと、おのずと選択した言語形式の丁寧度が、お互いの上下関係を顕在化させてしまうことになる。それを避けるために、中途終了型発話などの丁寧度のマーカーのない発話が用いられていると解釈できる。

本研究のインフォーマントは、初対面の会話のディスコース・ポライトネスの基本状態（無標ポライトネス）として、丁寧度を示すマーカーのある発話のみを見ると、敬語使用の原則、規範に則った言葉遣いをして、最低限のネガティブ・ポライトネス

を守っていることを表している。しかし、その一方で、丁寧度を示すマーカーのない発話を使用することによって、言語形式が人間の上下関係をマークすることを、巧みに避け、曖昧にしているのである。ここには、現代的な対等な人間関係を重んじる価値観が反映されていると考えられる。しかし、その一方で、初対面の会話においては有標行動となる常体を使用したポジティブ・ポライトネスの使用は、目上の話者に多い。つまり、心的距離を縮めることはできるが、言語形式の丁寧度は低い常体を使うという、ある意味で、規範的ではない言語使用は、いかにそれがポジティブ・ポライトネスの表現であろうとも、目下の話者からはしにくいということを物語っている。これらの結果には、対等な言葉で話したいという欲求と、しかし、やはり年長者に対して常体は使えないというインフォーマント（現代日本人）の微妙な心理が反映されていると言えよう。

### 4．4　スピーチレベルシフト

次に、スピーチレベルのシフト操作を分析することによって、ディスコース・ポライトネスの各要素の機能を、よりダイナミックに捉える。以下の図５に、ベースの総発話文数に占める各スピーチレベルシフトの割合の平均値を示す。（いずれも、対話相手の発話からのシフト、自分の発話からのシフトの合計。）



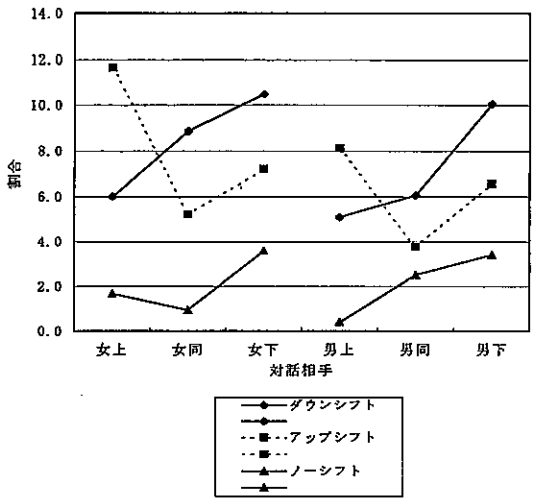



図5　総発話文数に占める各スピーチレベルシフトの割合の平均値（ベース）

#### 4．4．1　ダウンシフト

図５から明らかなように、対話相手の年齢に応じた傾向を示しているのは、ダウンシフト（敬体の使用から不使用へのシフト）である。すなわち、相手の年齢が下がると、ダウンシフトの割合が増えている。分散分析の結果では、ベースは、対目上との会話において、対同等、目下との会話より、有意にダウンシフトが少ない（$F$=5.54、$p$<0.05；$F$=27.09、$p$<0.001）という結果が出た。相手側の結果では、目上の話者が、同等、目下の話者よりも、有意に多くダウンシフトを用いていた（$F$=24.58、$p$<0.001；$F$=22.43、$p$<0.001）。つまり、目上には、ダウンシフトはしにくく、目下にはしやすい、ということである。スピーチレベルの結果で示したように、常体を含む発話（N）の使用傾向が、対話相手の年齢とほぼ反比例していることを考えると、当然のように思えるかもしれない。しかし、例えば、常体を含む発話（N）の使用が連続して生じた場合、常体を含む発話（N）の頻度は加算されるが、シフトは生じていないので、ダウンシフトの頻度は加算されない。そういう意味で、両者は同じではない。

### 4．4．2　アップシフト

本研究の初対面の会話データにおいては、スピーチレベルに関しては、約 60-70%を占める敬体が、ディスコース・ポライトネスの基本状態における無標形であると考えられる。そうすると、アップシフトというのは、基本状態の無標形に回帰しようとする行動であると捉えられる。単純に考えると、アップシフトの結果は、ダウンシフトの結果と反比例するのではないかと思われるかもしれない。しかし、図5を見ると明らかなように、アップシフトの割合は、対目上、対目下、対同等の順に多くなっている。分散分析の結果では、アップシフトは、目上の相手に対して、同等、目下の相手より有意に多く（$F$=19.49、$p$<0.001；$F$=4.89、$p$<0.05）、また、目下に対して、同等の相手より有意に多く（$F$=7.39、$p$<0.05）、用いられていた。

ここでは、対話相手からのシフトか自分の発話からのシフトか等に関する詳細なデータは示せないが、それらも考慮すると、アップシフトの結果は、以下の2点を示唆している。①一度、基本状態からダウンシフトされた発話をアップシフトさせ、基本状態に戻すことが多いのは、目下の話者である（相手の発話からのアップシフト（UI）が多い）。しかし、②自らの発話をダウンシフトさせやすく、その割合も高かった目上の話者も、ローカルなコンテクストに応じて一旦ダウンさせた発話を、後に自らアップシフトして、基本状態に戻している（US）。その結果、ダウンシフトが多かった目下の相手との会話において、むしろ同等の相手との会話におけるよりも、目上話者のアップシフトの割合が高くなったと考えられる。

### 4．4．3　スピーチレベルシフトの結果の総合的考察ー談話レベルから見た言語形式のシフト操作の機能ー

文レベルにおける言語形式選択の機能だけでなく、スピーチレベルシフトという談話レベルから捉えた言語形式選択の動きについての結果をまとめると、以下のようになる。

① ダウンシフトの割合は、相手の年齢、社会的地位と、ほぼ反比例しており（$r$=−0.34、$p$<0.01）、相手との力関係を顕著に反映している。



② アップシフトの割合は、相手の発話からのシフトか、自分の発話からのシフトかによって、異なる傾向を示した。（ただし、図5のアップシフトの結果は、対話相手と自分の発話双方からのアップシフトを合計したもので、以下に記述する傾向を反映していないことを断っておく。）相手の発話からのアップシフトは、相手の年齢、社会的地位と比例しているが（$r$=0.47、$p$<0.01）、自分の発話からのアップシフトは、相手の年齢、社会的地位と、むしろ反比例する傾向を示した（$r$=−0.25、$p$<0.05）。これは、ダウンシフトが多かった目上の話者が、自らスピーチレベルを基本状態に戻していることを示唆している。つまり、グローバルな観点から見ると、年齢にかかわらず、すべての話者が、ローカルな要因の影響でダウンシフトされたスピーチレベルを、基本状態に戻そうとしているという行動傾向が読み取れる。

③ 従来、ローカルな観点からの分析において、ダウンシフトは、心的距離の短縮など、ポジティブ・ポライトネスとして用いられることが多いことや、アップシフトには、話題の転換をマークする機能があることなどが報告されている。しかし、グローバルな観点からの分析を加えることによって、ポジティブ・ポライトネスとしてのダウンシフトは、目上には使いにくく、目下には使いやすいこと、アップシフトに関しては、目下の話者が、相手が一旦下げたスピーチレベルを基本状態に戻す割合が高いが、目上の話者も、自分で一旦下げたスピーチレベルを基に戻そうとしていることなど、ディスコース・ポライトネスを構成する要素の、より細やかな動きと機能が明らかになった。

## 5．ディスコース・ポライトネスという観点から見た敬語使用とスピーチレベルシフトという「動き」の機能

本研究では、まず、社会人の初対面二者間会話というディスコースの、ディスコース・ポライトネスを構成する要素の中から、いわゆる敬語使用（スピーチレベルの選択）とそのシフト操作を取り上げ、無標ポライトネスとしてのディスコース・ポライトネスの中で、これらがいかなる機能を果たしているのかを明らかにすることを試みた。その結果、社会人の初対面の会話においては、尊敬語や謙譲語の使用、敬体の使

用は、相手への待遇を示すと言うよりは、むしろ、話者の言葉遣いの特徴を指標しており、無標ポライトネスとしてのディスコース・ポライトネスの一部を形成していることが明らかになった。そして、有標ポライトネスとして、相手との関係、待遇をより顕著に反映しているのは、尊敬語や謙譲語の使用ではなく、むしろ常体の使用であることが明らかになった。

また、スピーチレベルシフトに関しては、社会人の初対面の会話においては有標行動と捉えられる常体の使用と、それを動的に捉えたダウンシフト、そして、対話相手がダウンシフトさせた発話を基本状態に戻す「相手の発話からのアップシフト」が、対話相手への待遇をより顕著に反映していることが明らかになった。しかし、同じアップシフトでも、自分の発話からのアップシフトは、むしろ、ダウンシフトの頻度と相関しているなど、各々の談話行動（discourse behavior）は、ディスコース・ポライトネスの中で、様々なふるまいを見せていることが明らかになった。

## 6．おわりに－本研究が、ポライトネスの談話理論に示唆すること－

Brown & Levinson がポライトネスの普遍理論を提唱して以来、数多くの研究が触発されるとともに、また様々な批判もなされてきた。日本語のように敬語を有する言語の研究者からの批判には、「ポライトネス」と「敬語使用の原則」を同一視していることに起因する、的を射ない批判も多かった。しかし、そういう批判を誘引する大きな原因の一つには、Brown & Levinson の理論が、主に、一発話行為レベル、或いは、幾つかの発話連鎖におけるポライトネスを対象としていたことにある。敬語を有する言語とそうでない言語のポライトネスを同じ枠組で比較検討し、ポライトネス理論をより普遍的なものへと発展させるためには、各言語の構造の違いが大きく反映される「文／発話行為」を対象とすることは不適であり、談話全体も、変数に加えたディスコース・ポライトネスという観点から捉えることが不可欠である（宇佐美、1998b、2001）。より普遍的なポライトネスの理論を構築するためには、このように、まず、特定の談話における無標ポライトネスとしてのディスコース・ポライトネスを同定した後に、その基本状態からの離脱と回帰というような「動き」を捉え、その動きが、談話内の諸要素のダイナミクスの総体としてのディスコース・ポライトネスの中で、いかなる



働きをしているのかということを明らかにしていく必要がある。有標行動という「動き」が生み出す機能という観点からポライトネスを分析することによって、構造の異なる諸言語のポライトネスを、単なる言語形式の丁寧度の問題としてや、間接的な表現方法か否かというような言語表現の仕方の問題として比較対照するだけではなく、その背後にある人間の心理や動機の共通性を見出すという観点から、比較対照することが可能になるからである。それには、中途終了型発話などの丁寧度を示すマーカーのない発話が談話の中で果たしている役割についても、ディスコース・ポライトネスの観点から捉えていく必要がある。

ポライトネスの表現方法は、様々な言語・文化によって当然異なる。しかし、なぜポライトネスを表現したいのかという動機や心理には、何らかの普遍性があると考える。Brown & Levinson のポライトネスの普遍理論は、まさに、そうした人間の社会的相互作用の根本にある心理の原則を追究しようとしたものであると言えよう。しかし、それを実現するためには、ポライトネス行動に寄与する要因を、各言語に固有の、スピーチレベルの丁寧度などの静的・固定的な要因のみに着目するのではなく、「ディスコース・ポライトネス」という概念を導入し、その基本状態を同定した上で、諸要素の「動き」が生み出す機能を探究していく必要がある。本稿にまとめた敬語使用の運用上の機能と、その使用・不使用（スピーチレベルシフト）という動きが生み出す機能は、ディスコース・ポライトネスを構成する主要な要素の一つに過ぎない。敬語の選択やスピーチレベルシフトのような言語形式の操作以外にも、いくつかの談話行動がディスコース・ポライトネスを構成し、また、対人関係調節機能を生み出していることが報告されている（宇佐美、2001）。今後は、さらにいくつかの主要な要素を同定し、そのメカニズムを探ることによって、ポライトネスの談話理論を模索したい。

### 注

1　本稿は、2000 年４月１－２日に、サンフランシスコ州立大学で開催された「第２回国際実用言語学会」における口頭発表（宇佐美、2000）、4 月 27-29 日にブリストルで開催された"Sociolinguistics Symposium 2000"における口頭発表（Usami、2000b）

の内容に加筆・修正を施したものである。両学会にて有益なコメントを下さった方々に感謝したい。

2　「ディスコース・ポライトネス」という概念、捉え方、「ポライトネスの談話理論構想」については、宇佐美（2001）でより詳しく論じたので、詳しくは、そちらを参照されたい。

3　後に説明する「基本的な文字化の原則：BTSJ」においては、基本的に「文」を分析単位としている。しかし、発話された文には、書き言葉における文とは、異なる性質があるため、「発話された文」という意味で「発話文」という用語を用いている。詳細は、宇佐美（1997a）を参照されたい。

4　Brown and Levinson（1987）は、ポライトネスは、ある発話行為が、相手のフェイスを脅かす度合い、「フェイス侵害度（FT度）」に応じて規定されるとする。具体的に数量化できるわけではないが、相手の「フェイス侵害度（FT度）」は、三つの要因に基づいて見積もられるとして、以下のように公式化している。

$$Wx = D(S,H) + P(H,S) + Rx$$

Wx:　フェイス侵害度（FT度）、行為（x）が相手のフェイスを脅かす度合い

D:　話し手(Speaker)と聞き手(Hearer)の「社会的距離(Social Distance)」

P:　聞き手(Hearer)の話し手(Speaker)に対する「力(Power)」

Rx:　特定の文化で、ある行為（x）が「相手にかける負荷度」の絶対的順位に基づく重み(absolute ranking of imposition)

つまり、ある行為xが相手のフェイスを脅かす度合い（Wx）、すなわち、フェイス侵害度の重みは、xという行為（例えば、旅行先で特定のものを購入してもらうよう依頼する）が、ある特定の文化の中でどのくらい相手に負担をかけると見なされているかという「相手にかける負荷度（R）」と、話し手と聞き手の「社会的距離（D）」（対称的関係）、聞き手の話し手に対する「相対的力（P）」（非対称的関係）の三要因が関数的に働いて決まってくるとしている。また、xという行為が相手にかける負荷度（R）の重みづけは、文化によって異なるとしている。

5　東京都立大学の西郡仁朗氏にご協力いただいた。記して感謝したい。



6　絶対的な基準はないが、Bakeman & Gottman（1986）では、この値が0.7未満であれば、コーディングの定義や分類方法等に問題があると見なしたほうがよいとされ、0.75以上は、信頼性が高いとみなしてよいとされている。

## 引用文献


＜邦文＞

宇佐美まゆみ(1995)「談話レベルから見た敬語使用：スピーチレベルシフト生起の条件と機能」、『学苑』第662号、昭和女子大学近代文化研究所、27－42.

----------(1996)「初対面二者間会話における話題導入頻度と対話相手の年齢・社会的地位・性の関係について」、『ことば』(現代日本語研究会)、17号、44-57.

----------(1997a)「基本的な文字化の原則（Basic Transcription System for Japanese:BTSJ）の開発について」『日本人の談話行動のスクリプト・ストラテジーの研究とマルチメディア教材の試作』文部省科学研究費一般研究（C）研究成果報告書.（URL：http://nihongo.human.metro-u.ac.jp/mic-J/nihongo/mic-j-kaiwa.html）

----------(1997b)「「ね」のコミュニケーション機能とディスコース・ポライトネス」『女性のことば：職場編』(現代日本語研究会編)、241-268. ひつじ書房.

----------(1998a)『初対面二者間72会話資料（年齢・性別統制）：エクセル版』、私家版.

----------(1998b)「ポライトネス理論の展開：ディスコース・ポライトネスという捉え方」、『日本語研究・教育年報1997度版』、東京外国語大学日本課程編、147-161.

----------(1999)「談話の定量的分析—言語社会心理学的アプローチ—」、『日本語学』、第18巻第11号10月号、明治書院、40-56.

----------(2000)「『ディスコース・ポライトネス』における敬語使用の機能：ポライトネス理論の普遍理論確立に向けての敬語使用の新しい捉え方」、『第2回国際実用言語学会』、4月1-2日. サンフランシスコ州立大学.

宇佐美まゆみ（2001）「談話のポライトネスーポライトネスの談話理論構想ー」『第7・回国立国語研究所国際シンポジウム報告書-談話のポライトネス-』、国立国語研究所編.

＜英文＞

Bakeman, Roger and Gottman, John. M. 1986. *Observing interaction: An introduction to sequential analysis*. Cambridge: Cambridge University Press.

Brown, Penelope and Levinson, Stephen. 1987. *Politeness: Some universals in language usage*. Cambridge: Cambridge University Press.

Ikuta, Shoko 1983. Speech level shift and conversational strategy. *Language Sciences*, 5(1), 37-53.

Usami, M (1993). Politeness in Japanese dyadic conversations between unacquainted people: Influence of power asymmetry. Paper presented at the 10th World Congress of Applied Linguistics, Amsterdam, Netherlands.

Usami, M. (1994). Politeness and Japanese conversational strategies: Implications for the teaching of Japanese. Unpublished qualifying paper. Harvard University.

Usami, M. (1996). Discourse politeness in Japanese conversation: From the results of s peech-level shifts and topic management strategies. Paper presented in special session s: Round table "Culture-specific behaviors and language teaching: Across disciplinary discussions," at the 11th World Congress of Applied Linguistics, Jyvaskyla, Finland.

Usami, M. (1999a). Discourse politeness in Japanese conversation: Some implications for a universal theory of politeness. Unpublished doctoral dissertation. Harvard University.

Usami, M. (1999b). On the notion of "Discourse Politeness": Based on the analyses of Japanese conversations. Paper presented at the International Symposium on Linguistic Politeness: Theoretical Approaches and Intercultural Perspectives (ISLP99). December 7-9, 1999. Chulalongkorn University, Bangkok, Thailand.

Usami, M. (2000a). Topic management strategy in "Discourse Politeness." Paper presented at the SIETAR Europe 10th annual congress, March 15-18, 2000. Brussels, Belgium.



Usami, M. (2000b). Honorific use as a stylistic marker and speech-level shift as a discourse politeness strategy. Paper presented at the Sociolinguistics Symposium 2000, April 27-29, 2000, Bristol, England.

Usami, M. (2000c). Discourse politeness in Japanese conversation: Some implications for a universal theory of politeness. Poster presented at the 7th International Pragmatics Association conference, July 9-14, 2000, Budapest, Hungary.

Usami, M. (2000d). Functions of honorifics and topic management in "Discourse Politeness" as unmarked politeness: From the analyses of Japanese conversations. Poster presented at the 10th annual meeting of the society for text and discourse. July 19-21, 2000. Lyon, France.

# How honorific use functions in "Discourse Politeness" in Japanese conversation: Some implications for a universal theory of politeness

Mayumi USAMI

The present study analyzed 72 Japanese dyadic conversations between new acquaintances with regard to the choice of honorifics at the sentence level and the shifts between the use and the non-use of polite forms within the same conversation as a discourse-level phenomenon. I define "Discourse Politeness" as "a dynamic whole of functions of any element in both linguistic forms and discourse-level phenomena such as speech-level shifts and backchanneling that play a part in the pragmatic politeness of a discourse."

Focusing on these sentence- and discourse-level phenomena, I investigated situational variations in their use among dyads of speakers who vary in age and gender, important sociolinguistic variables in Japanese culture. I also examined the relationships between the sentence-level choice of honorifics and the speech-level shift as a discourse-level phenomenon, and analyzed the dynamic functions of these elements in the overall Discourse Politeness in this group of conversations.

The results revealed five points about the present use of Japanese honorifics and the manipulation of speech level shifts. 1) The use of honorifics functioned more as a stylistic choice for the speaker than as a reflection of the actual relationship with the interlocutor as traditionally explained. 2) Female interlocutors used significantly more honorifics than did males; this was the only gender-related result. 3) Only the use of the non-polite form, a minor deviation from the normative language use and dominant speech level in the setting of this study, clearly reflected the age/power relationships between speaker and hearer. 4) The percentages of types "downshifts,"-- that is, "downshift from self," "downshift from interlocutor" and total downshifts, and of "upshift from interlocutor" as discourse-level phenomena clearly reflected the age/power relationships between speaker and hearer. In other words, speakers tended to downshift more frequently when talking with younger interlocutors, and to upshift from their interlocutor more frequently when they were talking with older interlocutors. These findings were statistically significant, as shown by an ANOVA. 5) Non-marked utterances that did not include any linguistic politeness markers accounted for about 25-30% of the total number of utterances in each conversation. This finding may indicate that speakers used non-marked utterances to avoid acknowledging the speakers' asymmetric relationships by choosing linguistic politeness markers that already embedded the vertical human relationships. Thus, they may have functioned as a discourse politeness strategy.



Based on these findings, I return to the universal theory of politeness, proposed by Brown and Levinson (1978, 1987), and claim that it is necessary to incorporate the concept of "Discourse Politeness" into studies of politeness. Doing so will enable researchers to contrast politeness behavior in languages with honorifics and without honorifics within the same framework, and to construct a more comprehensive "Discourse Theory of Politeness."